

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Commentaries on the Zhongguo xiaoshuo shilüe
(Lu-xun's a brief history of Chinese fiction) (VIII) (to
be continued)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1989-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中嶋, 長文, Nakajima, Osafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2253

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



中國小說史略考證 第八

中 島 長 文

第八篇 唐之傳奇文（上）

1 小說亦如詩、以至而影響遂及于曲

40+1

寫印本『大略』八云、唐傳奇體傳記（上） 小說亦如詩、至唐而一改進、雖大抵尚不出于搜奇記逸、然敘述宛轉、文辭華豔、發達之迹甚明。當時道釋二教、侈陳感通、有名位者又好談神異、于是方士文人、聞風而作、競爲異記。牛僧孺有玄怪錄、則李復言有續玄怪錄、薛漁思有河東記（序云續牛僧孺之書）、段成式有酉陽雜俎而其友溫庭筠有乾牒子、高駢從事裴例有傳奇、皆其例也。

然文人于雜集成書而外、亦撰記傳、始末詳悉、往々孤行、今頗有存于太平廣記中者（他叢書所收、多臆題撰人顛倒時代不足據）、實唐代特有之作也。

唐初、已有王度古鏡記（廣記二百三十）、無名氏補江總白猿傳（廣記四百四十四歐陽紇）。其後能文之士、相率有作、如（沈既濟）元稹白行簡陳鴻沈亞之蔣防等、皆擅長文筆、有名於時、故其傳奇、亦多工妙、後之友（符？）文人、每拾其事爲詞曲焉。

按唐人傳無「奇」字の誤記、後に「傳奇記傳」の語あり。記傳之實質、亦不外于二途、一爲異聞、一爲逸事。異聞者、或寓意以□寫？牢落之悲、或但弄翰墨以抒窈窕之思。逸事者、大概記時人情事、或更外軼聞、已離神怪、而較近于人事矣。今略舉其較著者于下。鉛印本は『史略』に全く同じい。

唐代傳奇の記述では寫印本『大略』と鉛印本『大略』(『史略』とは略同)とでかなり異なる。まず分量では鉛印本で三章になり一章分増えた。内容では寫印本の時點では「幻說」、「意識之創造」つまり虛構という視點が明確に打ち出されてはいない。この點が最も大きなちがいである。さらに寫印本では傳奇を異聞と逸事の二類に分ち、それぞれを二種に分つて、各類で章立てをしているが、鉛印本はむしろ寫印本での最初の部分の記述によつて單行(第八、九)と輯成(第十)という形式に分つて、異聞、逸事という概念を放棄している。『史略』はむしろ鉛印本の構成をそのままうけついでいる。寫印本の構成を圖示すれば次のようになる。

寫印本『大略』唐代傳奇第八、九篇の構成
唐傳奇體傳記(上)

總論

一、屬於異聞之前一類者

沈既濟『枕中記』『任氏傳』

李公佐『南柯太守傳』

二、屬於異聞之後一類者

李朝威『柳毅傳』

沈亞之『秦夢記』『湘中怨辭』『異夢錄』

張文成『游仙窟』

牛僧孺『周秦行紀』

唐傳奇體傳記（下）

一、屬於逸事之前一類者

蔣防『霍小玉傳』

元稹『鶯鶯傳』

白行簡『李娃傳』

許堯佐『柳氏傳』

失名氏『虬髯』

二、屬於逸事之後一類者

陳鴻『東城老父傳』

「小說的變遷」第三講云、小說到了唐時、却起了一個大變遷。我前次說過、六朝時之志怪與志人底文章、都很簡短、而且當作記事實。及到唐時、則為有意識的作小說、這在小說史上可算是一大進步。而且文章很長、并能描寫得曲折、和前之簡古的文體、大不相同了、這在文體上也算是一大進步。但那時作古文底人、見了很不滿意、叫它做「傳奇體」。「傳奇」二字、當時實是瞥貶的意思、并非現代人意中的所謂「傳奇」。可是這種傳奇小說、現在多沒有了、只有宋初底『太平廣記』——這書可算是小說的大類書、是搜集六朝以至宋初底小說而成的——我們于其中還可以看出見唐時傳奇小說底大概。中略。」唐至開元天寶以後、作者蔚起、和以前大不同了。從前看不起小說的、此時也來做小說了、這是和當時底環境有關係的、因為唐時考試的時候、甚重所謂「行卷」、就是舉子初到京、先把自己得意的詩抄成卷子、拿去拜謁當時的名人、若得稱贊、則「聲價十倍」、後來便有及第的希望、所以行卷在當時看得很重要。到開元天寶以後、漸漸對於詩、有些厭氣了、于是就有人把小說也放在行卷裏去、而且竟也可以得名。所以從前不滿意小說的、到此時也多做起小說來、因之傳奇小說、就盛極一時了。後略。

『唐宋傳奇集』序例全集卷第十云、東越胡應麟在明代、博涉四部、嘗云、「凡變異之談、盛于六朝、然多是傳錄舛訛、

未必盡幻設語。至唐人、乃作意好奇、假小說以奇筆端。如『毛穎』『南柯』之類尙可、若『東陽夜怪』稱成自虛、『玄怪錄』元無有、皆但可付之一笑、其文氣亦卑下亡足論。宋人所記、乃多有近實者、而文彩無足觀。」其言蓋幾是也。鑒于詩賦、旁求新塗、藻思橫流、小說斯燦。而後賢秉正、視同土沙、僅賴『太平廣記』等之所包容、得存什一。顧復緣賈人貿利、撮拾彫鏤、如『說海』、如『古今逸史』、如『五朝小說』、如『龍威秘書』、如『唐人說會』、如『藝苑摛華』、爲欲總目爛然、見者眩惑、往往妄製篇目、改題撰人、晉唐稗傳、黥削幾盡。夫蟻子惜鼻、固猶香象、嫫母護面、詎遜毛嬙、則彼雖小說、夙稱卑卑不足廁九流之列者乎、而換頭削足、仍亦駭心之厄也。昔嘗病之、發意匡正。先輯自漢至隋小說、爲『鈎沈』五部訖。漸復錄唐宋傳奇之作、將欲彙爲一編、較之通行本子、稍足憑信。而屢更顛沛、不遑理董、委諸行篋、分飽蟬蠹而已。今夏失業、幽居南中、偶見鄭振鐸君所編『中國短篇小說集』、掃蕩煙埃、斥僞返本、積年堙鬱、一旦霍然。惜『夜怪錄』尙題王洙、『靈應傳』未刪于邈、蓋于故舊、猶存眷戀。繼復讀大興徐松『登科記考』、積微成昭、鈎稽淵密、而于李徵及第、乃引李景亮『人虎傳』作證。此明人妄署、非景亮文。彌歎雖短書俚說、一遭纂亂、固貽害于談文、亦飛災于考史也。頓憶舊稿、發篋諦觀、黯澹有加、渝敞則未。乃略依時代次第、循覽一周。諒哉、王度『古鏡』、猶有六朝志怪餘風、而大增華豔。千里『楊倡』、柳埕『上清』、遂極庫弱、與詩運同。宋好勸懲、撫實而泥、飛動之致、眇不可期、傳奇命脈、至斯以絕。惟自大歷以至大中、作者雲蒸、鬱術文苑、沈既濟許堯佐擢秀于前、蔣防元稹振采于後、而李公佐白行簡陳鴻沈亞之輩、則其卓異也。特『夜怪』一錄、顯託空無、逮今允成陳言、在唐實猶新意、胡君顧貶之至此、竊未能同耳。自審所錄、雖祕文、而曩曾用心、仍自珍惜。復念近數年中、能懇懇顧及唐宋傳奇者、當不多有。持此涓滴、注彼說淵、獻我同流、比之芹子、或亦將稍減其考索之勞、而得翫繹之樂耶。于是杜門攤書、重加勘定、匝月始就、凡八卷、可校印。結願知幸、

方欣已歎。顧舊鄉而不行，弄飛光于有盡，嗟夫，此亦豈所以善吾生，然而不得已也。猶有雜例，並綴左方。

一、本集所取資者，爲明刊本『文苑英華』、清黃晟刊本『太平廣記』、校以明許自昌刻本、涵芬樓影印宋本『資治通鑑考異』、董康刻士禮居本『青瑣高議』、校以明張夢錫刊本及舊鈔本、明翻宋本『百川學海』、明鈔本原本『說郛』、明顧元慶刊本『文房小說』、清胡珽排印本『琳琅祕室叢書』等。

一、本集所取，專在單篇。若一書中之一篇，則雖事極煥赫，或本書已亡，亦不收采。如袁郊『甘澤謠』之紅線、李復言『續玄怪錄』之杜子春、裴鉞『傳奇』之崑崙奴轟隱孃等是也。皇甫枚『飛煙傳』，雖亦是『三水小牘』逸文，然『太平廣記』引則不云出于何書，似曾單行，故仍入錄。

一、本集所取，唐文從寬，宋製則頗加決擇。凡明清人所輯叢刊，有妄作者，輒加審正，黜其僞欺，非敢刊落，以求信也。日本有『游仙窟』，爲唐張文成作，本當置『白猿傳』之次，以章矛盾君方圖版行，故不編入。

一、本集所取文章，有複見于不同之書，或不同之本，得以互校者，則互校之。字句有異，惟從其是。亦不歷舉某字某本作某，以省紛煩。倘讀者更欲詳知，則卷末具記某篇出于何書何卷，自可覆檢原書，得其究竟。

一、向來涉獵雜書，遇有關於唐宋傳奇，足資參證者，時亦寫取，以備遺忘。比因奔馳，頗復散失。客中又不易得書，殊無可作。今但會集叢殘，稍益以近來所見，併爲一卷綴之末簡，聊存舊聞。

一、唐人傳奇，大爲金元以來曲家所取資，耳目所及，亦舉一二。第于詞曲之事，素未用心，轉販故書，諒多謬略，精研博考，以俟專家。

一、本集篇卷無多，而成就頗亦匪易。先經許廣平君爲之選錄，最多者『太平廣記』中文。惟所據僅黃晟本，甚慮譌誤。去年由魏建功君校以北京大學圖書館所藏明長洲許自昌刊本，乃始釋然。逮今綴緝雜札，擬置卷末，而舊稿

潦草、復多涓疑、蔣徑三君爲致書籍十餘種、俾得檢尋、遂以就緒。至陶元慶君所作書衣、則已貽我于年餘之前者矣。廣賴衆力才成此編、謹藉空言、普銘高誼云爾。

中華民國十有六年九月十日、魯迅校畢題記。時大夜彌天、壁月澄照、螢蚊遙歎、余在廣州。唐代小說的輯本の杜撰について述べたものに早く一九二二年に書かれた「破『唐人説書』」(『集外集拾遺』全集卷

七)がある。

「六朝小説和唐代傳奇文有怎樣的區別。」(『且介亭雜文二集』全集卷六云、至于他們之所以著作、那是無論六朝或唐人、都是有所爲的。『隋書經籍志』抄『漢書藝文志』說、以著錄小説、比之「詢于芻蕘」、就是以爲雖然小説、也有所爲的明證。不過在實際上、這有所爲的範圍却縮小了。晉人尙清談、講標格、常以寥寥數言、立致通顯、所以那時小説、多是記載畸行隽語的『世説』一類、其實是借口舌取名位的入門書。唐以詩文取士、但也看社會上的名聲、所以士子入京應試、也須豫先干謁名公、呈獻詩文、冀其稱譽、這詩文叫作「行卷」。詩文既濫、人不欲觀、有的就用傳奇文、來希圖一新耳目、獲得特效了、于是那時的傳奇文、也就和「敲門磚」很有關係。但自然、只被風氣所推、無所爲而作者、却也并非沒有的。

『少室山房筆叢』卷二九、九流緒論下云、小説、唐以前、紀述多虛、而藻繪可觀。宋人以後、論次多實、而彩豔殊乏。蓋唐以前出文人才士之手、而宋以後率俚儒野老之談故也。

又卷三六、二酉綴遺中云、凡變異之談、盛於六朝、然多是傳錄舛訛、未必盡幻設語。至唐人乃作意好奇、假小説以寄筆端。如毛穎南柯之類尙可。若東陽夜怪錄稱成自虛、玄怪錄元無有、皆但可付之一笑。其文氣亦卑下亡足論。宋人所記、乃多有近實者、而文彩無足觀。本朝新餘等話、本出名流、以皆幻設、而時益以俚俗、又在前數家下。惟廣記所錄唐人闢關事、咸綽有情致、詩詞亦大率可喜。

陳師道『後山詩話』云、范文正公爲岳陽樓記、用對語說時景、世以爲奇。尹師魯讀之曰、傳奇體爾。傳奇、唐裴鉞所著小說也。歷代詩話本

『直齋書錄解題』卷二、小說家類云、傳奇六卷、唐裴鉞撰、高駢從事也。尹師魯初見范文正岳陽樓記曰、傳奇體耳。然文體隨時、要之理勝爲貴、文正豈可與傳奇同日語哉。蓋一時戲笑之談耳。後略。

蔣瑞藻編『小說考證』卷一〇、引「曲苑叢談」云、陶宗儀『輟耕錄』曰、唐曰傳奇、宋曰戲譚、元曰雜劇院本。今名曲爲傳奇、蓋元末已有此言、然傳奇故非戲曲。『唐書藝文志』有裴鉞『傳奇』一卷、在小說家、其書不傳。『太平廣記』『法苑珠林』諸書、頗引其佚文、特齊諧志怪之流。裴、晚唐人、爲高駢客、以駢好神仙、故譚此書以惑之。文體雖近俳、非樂府歌曲也。范文正爲「岳陽樓記」、宋人譏爲傳奇體、則傳奇又爲文體卑靡之稱。或後有裴鉞記中事跡爲戲劇張本者、因有是名耳。此與蘇鶚「演義」之名正同、蘇書具在、元文可按、絕非「宣和遺事」之比。世所行章回體小說、實出於「宣和遺事」、而皆蒙演義之名、沿用既久、世人亦不復察矣。「曲苑叢談」未詳。文中「法苑珠林」が裴鉞「傳奇」の佚文を引くというのはもとより杜撰。

「此類文字、當時或爲叢集、或爲單篇、大率篇幅曼長、記叙委曲、時亦近于俳諧、故論者每訾其卑下、貶之曰「傳奇」、以別于韓柳之高文。顧世間則甚風行、文人往往有作、投謁時或用之爲行卷、今頗有留存于『太平廣記』中者、實唐代特絕之作也」この一節のうち傍點を施した部分の記述は、もともと『大略』寫印本では『枕中記』に關する記載であったのだが、鉛印本でそこから析出して総論部分に移し現行のような行文になったものである。そこに述べられたことが、誰の、どのような批評かを特定することはなかなか難しい。

個別に字句を摘記してみると、「貶之曰「傳奇」」という部分は、おそらくは前掲の諸書にいう范仲淹の「岳陽樓

「記」に對する尹洙の批評といわれるものに關つてこよう。汪辟疆が『唐人小説』の「傳奇」の按語で「其書『傳奇』盛傳於趙宋之世、故宋人輒目唐人小説之涉及神仙詭譎之事、概稱之曰傳奇。陳振孫『直齋書錄解題』、既取此書入小說類、并云前出、省略。觀於振孫辨駁之語、則宋時鄙薄之辭、又可概見」と述べるのもそれらの説を承けるものである。

『後山詩話』まではともかく、陳振孫『直齋書錄解題』の評語は確かに魯迅の意識にあつたと考えてよからう。

しかしこの節はすぐに後の時代の記述に續くし、もう一度一節全體を讀み直してみれば、これは通じて唐代の傳奇に關する唐代の状況を述べたものと考えより他ない。『後山詩話』の件は宋代のことである。そこで更めて「此類文字」たる一群の作品が「之を貶めて『傳奇』と曰」われたのは唐代のどういふ事實なのかということが問われなければならぬ。だがそういう事實を指摘することはいまのところ不可能である。それで次のような反論が出てくる。

李宗爲『唐人傳奇』二頁（中華書局・一九八五）はいう。

現在有許多論者常常不加論證地述及唐人已稱此類小説爲「傳奇」、并且說唐人用這名稱是表示輕蔑、表示有別於高雅的古文。此說影響極大而實毫無根據。究其來源、實出于對魯迅『中國小説史略』所述的誤解。魯迅說、引此類文字至韓柳輩之高文。從略。因爲說得不十分具體明確、因此引起了誤解。魯迅說這段話的根據、出于宋陳師道『後山詩話』、前已所引、從略。因此據以謂唐代已有「傳奇」之稱不正確的。如果說早在唐代「傳奇」已成了小説樣式的名稱、且是論者「嘗其卑下」而用的貶稱、那麼中唐的元稹和晚唐裴鉶還會先後用它作爲自己作品的名目嗎？顯而易見、絕無此種可能。

今人又每以上引『後山詩話』中的那段話作爲「傳奇」名稱在北宋已有的證據、這也明顯是一種誤解。在那段話中、陳師道明確地說明了「傳奇」是「唐裴鉶所著小説也」、則尹師魯所謂的「傳奇」體、當然是指那種象裴鉶

「傳奇」那樣「用對語說時景」的文體、以別于韓愈等所提倡的古文體、根本不是指某類小說樣式。

李氏はずいぶん遠慮勝ちに魯迅の『史略』の記述に對する誤解からだと言っているが、ここははっきり魯迅の誤りで、少なくとも「貶之曰『傳奇』、以別于韓柳之高文』の二句は削除すべきだと言った方がよい。魯迅の文は『直齋書錄解題』に表われた傳奇に對する低い評價と、たとえば韓愈の「毛穎傳」に對して見られた當時の一般士人の「其の俳諧を病む」といった否定的な風潮（後條、參照）とが、おそらく短絡してこういう表現となったと考えられる。

のちに「傳奇」ということばで呼ばれる唐代の一群の作品が唐代に「貶めて傳奇と曰」われたことはないという李氏の指摘は確かにその通りであろう。だが魯迅がいう「其の俳諧に近きが故に論者毎に其の卑下たるを訾」ったのは一般的風潮としては事實であろうし、また唐人はそれら作品に給じた名を與えることはしなかったけれども、それらと「韓柳の高文とを別」ったのも事實であろう。唐人は、合理的であると同時に強いリグリズムに縛られた宋人に比べればずっと豁達で自在ではあったが、それでも傳統的な文章意識からそれほど自由であったとは思えない。傳奇は唐代に花咲き稔ったジャンルであるが、はじめからというより終始文章場裡を堂々と闊歩したことはない。したがって傳奇の文章に於ける位置および製作者並びに鑑賞者の傳奇に對する意識というものは、李氏の言説にかかわらず檢討の餘地があるように思われる。

そもそも「傳奇」ということばを元稹（元稹がその「鶯鶯傳」に「傳奇」ということばを使ったのが最初だといふ。周紹良「『傳奇』箋證」『紹良叢稿』所收・齊魯書社・一九四）下孝萱「『鶯鶯傳』的原標題及寫作年代」『唐代文史論叢』所收・山西人民出版社・一九六〇）なり裴鉉なりが自分の作品に就いて用いたとき、いったいそれはどんな意味あいをこめて使われたのか。「奇を傳う」の「奇」とは珍奇、偏奇、怪奇、新奇の「奇」であって、むろん並みのも

のではないということを表わすが、並みのものではない「奇」などということが、この國の正統の精神史に於て肯定的な評價を與えられたことなど、いちおう近代以降は別としてもおそろくない。同時にそうした奇を伝える器の方もむろんまた並みではないわけであつて、それが文章である以上、規範的文章たる正統の詩文に對する距離感が「傳奇」ということばには必ずこめられていたはずである。つまりそこには「傳奇」ということばで概括されるような作品群が、發生の當初はともかく、かなり成熟した作品を輩出するようになって堂々と正面から文章の場に登場できないうような條件があつた。それはやはり文章は經國の大業であり、載道の器であるといった儒家者流の考えかたがこの國の文章についての意識をほとんど獨占していたことである。そうした傳統的な文章意識から正統の詩文に對して傳奇がもつた一種のひけめとでもいふべき心的態度を、「傳奇」ということばはそのものにすでに讀みとることができるのである。

さらにそのことは、傳奇の多くが史傳の體、とりわけ論贊の形式を借りたことに特徴的に表われていると思われ。たとえば元稹の『鶯鶯傳』は「時人多許張爲善補過者。予嘗於朋會之中、往往及此意者、夫使知者不爲、爲之者不惑云々」でもつて終る。これは史傳でいへば論贊の部分にあたる。唐代傳奇では早く沈既濟の『枕中記』や『任氏傳』に見られ、以後多くの單行の傳奇がこの形式を採る。輯成された傳奇集はほとんどのものが序跋を失っているが、元來序跋があつたとすればそこでおそらく同様のことが述べられていただろう。これは傳奇が史傳に體裁を借りたこととの化石器官、つまり盲腸か尾骶骨のごときものであつて、すでに史傳における本來の働きというものは完全にちがつてしまつているのだが、ただのマナリズムとして見過してしまふわけにはいかない。というのはこの部分こそ正しく、この話は寓言に託したものだということを示す部分であり、たとえば「禍福を談じて懲勸を寓する」ところ

であり、話の實質はどのようなものであれ規悔の意ありということをごどうしても示しておかなければならないところであるからだ。いわば小説の存在證明のようなものだ。そのため以後白話小説をも含めて文學革命までの舊小説は多く史傳の論贊の部分で述べられるようなことをまねて、どこかに一筆つけ加え、外部に對する自己存在の口實とした。のちに傳奇が行卷に使われたのだとしたら、いよいよこの部分を缺くことはできなかつたろう。傳奇がこうした形式を借りて自己辨明せざるを得なかつたところに、規範的な思想や文章に對して一人立ちできぬことの自己認識が端的に表われている。

そのことはまた、韓愈の「毛穎傳」に對する一般士人の否定的な反應を考えてみたばあい一層はつきりするだるう。「毛穎傳」の評價については後條、參照）柳宗元は「毛穎傳」を辨護するのに、『詩經』や『史記』滑稽列傳を例として引用し、結局俳諧は聖人の道に背かないのだという論理（韓愈が張藉の批判を駁したのもこれと同じ論理なのはおもしろい）を使っているのが、直接の理屈はともかく、儒家者流の規悔の意を寓するのだという傳奇の末尾の辨明の言と一致するのは示唆的である。晩唐には「高文」と評された「毛穎傳」にして當初は否定的反應を受け、しかもそれを辨護するのに儒家者流の思想および文章意識を一步も超えられなかつたのだから、他の傳奇類については推して知るべしである。

以上のことから、元稹や裴鉞が自分の作品を「傳奇」といい、他の作者が自己の傳奇作品を持出すばあい、たといそれらが行卷に公然と使われるようになり、不遇の才人によって個別的には必死で書かれたとしても、それらは結局自分たちの手すさびにすぎないんだよという暗黙の了解が、讀み手をも含めてあつたと想定することができる。省卷に傳奇を提出して受験をふいにした男の話（後掲『南部新書』）がそれを外側から證明する。傳奇をめぐる書き手と

讀み手にそういう心的態度が考えられるならば、「傳奇」ということばと事實の考證の點で甘さがあるにせよ、魯迅が「之を貶めて傳奇と曰う」と書いたのもあながち的はずれとはいえないように思われる。

趙彥衛『雲麓漫鈔』卷八云、唐之舉人、先藉當世顯人、以姓名達之主司、然後以所業投獻、驗數日又投、謂之溫卷、如幽怪錄傳奇等皆是也。蓋此等文備衆體、可以見史才詩筆議論。後略。小説が行卷に用いられたことを言う資料として、この一節は周知のものである。文中「溫卷」の語については程千凡『唐代進士行卷與文學』（一九八〇・上海古籍出版社）二六頁に訂正がある。また錢易

『南部新書』甲に「李景讓典貢年、有李復言者、納省卷、有纂異一部十卷。牌出曰、事非經濟、動涉虛妄、其所納仰貢院驛使官却還。復言因此罷舉。」とあるのは、省卷についてであるが、これも行卷に小説が用いられたことの傍證となるのは程氏（同書八五頁）の説の如くである。

各版大きな異同はない。「作意」「幻設」の括弧は訂正版ではじめて附けられ、「高文」の後の句讀も訂正版で句點となった。それまでは讀點。「今頗有留存」の「留」字も訂正版で附加された。「他書所收」の「書」字二版のみ脱すが、これは誤。

2 幻設爲文、以至甚異其趣矣

寫印本『大略』にはこの記述に該當する部分がない。鉛印本は『史略』の「『坊者王承福傳』柳宗元『種樹郭橐駝傳』」を「毛穎傳」とする他は『史略』に同じい。

「六朝小説和唐代傳奇文有怎樣的區別？」「且介亭雜文二集」全集卷六云、唐代傳奇文可就大兩樣了。神仙鬼妖物、都可隨便驅使。文筆是精細、曲折的、至于被崇尚簡古者所詬病。所叙的事、也大抵具有首尾和波瀾、不止一點斷片的談柄。而且作者往往故意顯示着這事迹的虛構、以見他想像的才能了。／＼但六朝人也并非不能想像和描寫、不過他不用于小説、這類文章、那時也不謂之小説。例如阮籍的「大人先生傳」、陶潛的「桃花源記」、其實倒和後來的唐代傳奇文相

近。就是嵇康的「聖賢高士傳贊」（今僅有輯本）、葛洪的「神仙傳」、也可以看作唐人傳奇文的祖師的。李公佐作「南柯太守傳」、李肇爲之贊、這就是嵇的「高士傳」法。陳鴻「長恨傳」置白居易的長歌之前、元稹的「鶯鶯傳」既錄「會真詩」、又學李公垂「鶯鶯歌」之名作結、也令人不能想不到「桃花源記」。「史略」では阮籍の「大人先生傳」から陶潛の「桃花源記」、そして柳宗元の「種樹郭橐駝傳」に至るいわゆる「高文」に屬する系統のものを「威以寓言爲本、文詞爲末」であるが故に「無涉于傳奇」として、「傳奇」とは系統的に區別した。そして「傳奇者流、源蓋出于志怪」と斷じたのであるが、ここでは「大人先生傳」から葛洪の「神仙傳」まで幻設によって文を爲った點で、唐代傳奇の「祖師」と視なすことができるというのであるから、「史略」での記述をいささか訂したと考えてよい。但しそれはあくまで源流として「大人先生傳」等が考えられるというだけのことであって、「寓言爲本、文詞爲末」という「高文」との區別の基準を放棄したものではない。このことは魯迅の唐代傳奇に對する見方の上で非常に重要なことである。

阮籍「大人先生傳」 『阮嗣宗集』、『全三國文』卷四六。

劉伶「酒德頌」 『文選』卷四七、『藝文類聚』卷七二、『晉書』劉伶傳。『全晉文』卷六六。

王績「醉鄉記」 『東臯子集』 『唐文粹』卷七一、『文苑英華』卷八三三、『全唐文』卷一三二。「其流可衍爲王績『醉鄉記』」については次條³に引く『東臯子集』序や『新唐書』王績傳を參照。

『大人先生傳』及び『酒德頌』の後の讀點は三八年版全集ではじめて附けられた。

3 隋唐間、以至蓋度所假設也

寫印本『大略』には該當する記述がない。鉛印本は下記の點を除き『史略』に同じい。「文中子通之弟」の上に「爲」字有り。「東臯子績兄也」の「也」字なく、續く「蓋生于開皇初（宋晁公武『郡齋讀書志』十云通生于開皇四年）」の句、「（約五五—六三）」、および「遺文僅存此篇而已。」の「遺文」二字いずれもなし。

「小說的變遷」第三講云、唐之初年、有王度做的『古鏡記』、是自述得一神鏡底異事、文章雖很長、但僅綴許多異事成、還不脫六朝志怪底流風。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、『古鏡記』見『太平廣記』卷二百三十、改題王度、注云、出『異聞集』。『太平御覽』(九百十二)引其程雄家婢一事、作隋王度『古鏡記』、蓋緣所記皆隋時事而誤。『文苑英華』(七百三十七)顧況『戴氏廣異記』序云「國朝燕公『梁四公記』、唐臨『冥報記』、王度『古鏡記』、孔慎言『神怪志』、趙自勳『定命錄』、至如李庾成、張孝舉之徒、互相傳說。」則度實已入唐、故當爲唐人。惟『唐書』及『新唐書』皆無度名。其事迹之可藉本文考見者、如下。

大業七年五月、自御史罷歸河東。六月、歸長安。 八年四月、在臺。冬、兼著作郎、奉詔撰國史。 九年秋、出兼芮城令。冬、以御史帶芮城令、持節河北道、開倉賑給陝東。 十年、弟勳自六合丞棄官歸、復出游。 十

三年六月、勳歸長安。

由隋入唐者有王績、絳州龍門人、『新唐書』(一九六)隱逸傳云、「大業中、舉孝悌廉潔、不樂在朝、求爲六合丞。以嗜酒不任事、時天下亦亂、因劾、遂解去。歎曰、『羅網在天下、吾且安之。』乃還鄉里。……初、兄凝爲隋著作郎、撰『隋書』、未成、死。續續餘功、亦不能成。」則『唐書』之績及凝、卽此文之勳及度、或度一名凝、或唐書字誤、未能詳也。『唐書』(一九二)亦有續傳、云、「貞觀十八年卒。」時度已先歿、然不知在何年。宋晁公武『郡齋讀書志』(十四)類書類有古鏡記一卷、云、「右未詳撰人、纂古鏡故事。」或卽此。『御覽』所引一節文字小有不同。如「爲下邳陳思恭義女」下有「思恭妻鄭氏」五字、「遂將鸚鵡」之「將」作「劫」、皆較『廣記』爲勝。

『郡齋讀書志』卷十、子部儒家類云、阮逸注中說十卷 右隋王通之門人、共集其師之語爲是書。中略。通生於開皇四年。下略。

これ及び「神邊小綴」の記述から、魯迅の用いた「郡齋讀書志」はいわゆる「衢州本」であることが分る。

『舊唐書』卷一九二王績傳云、王績字無功、絳州龍門人。少與李播、呂才爲莫逆之交。隋大業中、應孝悌廉潔舉、授揚州六合縣丞、非其所好、棄官還鄉里。績河渚中先有田數頃、鄰渚有隱士仲長子先、服食養性、績重其真素、願與相近、乃結廬河渚、以琴酒自樂。嘗遊北山、因爲「北山賦」以見志、詞多不載。績嘗躬耕於東臯、故時人號東臯子。或經過酒肆、動經數日、往往題壁作詩、多爲好事者諷詠。貞觀十八年卒。臨終自剋死日、遺命薄葬、兼預自爲墓誌。有文集五卷。又撰『隋書』、未就而卒。／兄通、字仲淹、隋大業中名儒、號文中子、自有傳。

『新唐書』卷一九六王績傳云、王績字無功、絳州龍門人。性簡放、不喜拜揖。兄通、隋末大儒也、聚徒河汾間、做古作『六經』、又爲『中說』以擬『論語』。不爲諸儒稱道、故書不顯、惟『中說』獨傳。通知績誕縱、不嬰以家事、鄉族慶弔冠昏、不與也。與李播、呂才善。

大業中、學孝悌廉潔、授祕書省正字。不樂在朝、求爲六合丞、以嗜酒不任事、時天下亦亂、因劾、遂解去。歎曰、「網羅在天、吾且安之。」乃還鄉里。有田十六頃在河渚間。仲長子光者、亦隱者也、無妻子、結廬北渚、凡三十年、非其力不食。績愛其真、徙與相近。子光瘡、未嘗交語、與酌酒權甚。績有奴婢數人、種黍、春秋釀酒、養鳧鴈、蒔藥草自供。以『周易』、『老子』、『莊子』置牀頭、佗書罕讀也。欲見兄弟、輒度河還家。游北山東臯、著書自號東臯子。乘牛經酒肆、留或數日。

高祖武德初、以前官待詔門下省。故事、官給酒日三升、或問、「待詔何樂邪。」答曰、「良醞可戀耳。」侍中陳叔達聞之、日給一斗、時稱「斗酒學士」。貞觀初、以疾罷。復調有司、時太樂署史焦革家善釀、績求爲丞、吏部以非流不許、績固請曰、「有深意。」竟除之。革死、妻送酒不絕、歲餘、又死。績曰、「天不使我酣美酒邪。」棄官去。自是太樂

丞爲清職。追述革酒法爲經、又采杜康、儀狄以來善酒者爲譜。李淳風曰、「君、酒家南、董也。」所居東南有盤石、立杜康祠祭之、尊爲師、以革配。著「醉鄉記」以次劉伶、「酒德頌」。其飲至五斗不亂、人有以酒邀者、無貴賤輒往、著「五斗先生傳」。刺史崔喜悅之、請相見、答曰、「奈何坐召嚴君平邪。」卒不詣。杜之松、故人也、爲刺史、請續講禮、答曰、「吾不能揖讓邦君門、談糟粕、棄醇醪也。」之松歲時贈以酒脯。初、兄凝爲隋著作郎、撰「隋書」未成死、續續餘功、亦不能成。豫知終日、命薄葬、自誌其墓。

續之仕、以醉失職、鄉人斬之、託無心子以見趣曰、「無心子居越、越王不知其大人也、拘之仕、無喜色。越國法曰、「穢行者不齒。」俄而無心子以穢行聞、王黜之、無愠色。退而適茫茫之野、過動之邑而見機士、機士撫髀曰、「噫。子賢者而以罪廢邪。」無心子不應。機士曰、「願見教。」曰、「子聞蜚廉氏馬乎。一者朱鬣白鬣、龍鶻鳳億、驟馳如舞、終日不釋轡而以熱死。一者重頭昂尾、駝頸貉膝、踉蹌善蹶、棄諸野、終年而肥。夫鳳不憎山栖、龍不羞泥蟠、君子不苟契以罹患、不避穢而養精也。」其自處如此。

呂才『東泉子集』序云、君姓王氏、諱續、字無功、太原祁人也。高祖晉穆公、自南歸北、始家河汾焉。歷宋魏迄于周隋六世、冠冕國史家牒焉。君性好學、博聞強記、與李播陳永呂才爲莫逆之交。陰陽曆數之術、無不洞曉。大業末、應孝悌廉潔舉、射高第。除祕書正字。君性簡放、飲酒至數斗不醉。常云、恨不逢劉伶與閉戶轟飲。因著醉鄉記及五斗先生傳、以類酒德頌云。後略。四部叢刊本。「この序は兩『唐書』の資料になつたものごとく、また王氏兄弟が少なくとも七人あつたことが「君第七弟靜」とあることから分る。新舊兩『唐書』が續の籍貫を「絳州龍門人」とするの、魯迅が遠い原籍を持ち出し「太原祁人」とするのは、おそらく呂才の序文に據つたのであろうが、續自身の文章「游北山賦」や「自撰墓誌」にもそうした名のが見える。なお王通五代の孫王質の傳「舊唐書」卷一六三も「質字華卿、太原祁人」とする。

王績「遊北山賦」序『文苑英華』卷九七云、吾周人也。本家于祁。永嘉之際、扈從江右地。實儒素人多高烈。穆公感建元之恥、歸于洛陽同州、悲永安之事、退居河曲。始則晉陽開國、終乃安康受田。墳隴寓居、倏焉五葉、桑榆成蔭、俄將百年。勳南山故情、老而彌篤、東坡餘業、悠哉自寧。後略。又『東皋子集』卷上

王績「自撰墓誌」銘『東皋子集』卷下云、有唐逸人、太原王績。

王績「與陳叔達重借隋紀書」『唐文粹』卷八二云、前略。僕亡兄芮城、嘗典著局。大業之末、欲撰隋書、俄逢喪亂、未及終畢。僕竊不自揆、思卒餘功、收撮漂零、尙存數帙。兆自開皇之始、迄于大業之初、咸亡兄黜竄之遺迹也。大業之後、言事闕然、僕雖欲繼成、無可憑採。以此尤思足下之所作也。還使請致無再三。王績曰。

魯迅の「王度即王凝」説には留保がついているけれども、この説に對する異議が出ている。孫望「王度考」(『學術月刊』一九三三年第四期)である。孫氏の説をごく簡略にすれば、王通の子王福時の「王氏家書雜錄」(『中説』附録)に「(貞觀)十九年(六四四)仲父(即凝)被起爲洛州錄事」とあり、王績の死は『舊唐書』に「貞觀十八年(六四三)」とするから、貞觀九年(六三三)に死去した陳叔達と、王績との往復書簡に言う「亡兄芮城」「賢兄芮城」は當然仲父王凝とは別人でなければならぬ。そして『文中子中説』「魏相篇」に「芮城府君讀說苑、子(王通)見之曰、美哉兄之志也」とあるからには芮城は王通の兄でなければならぬ。しかもこの芮城こそは『古鏡記』にある芮城令王度である、というものである。もしも「王氏家書雜錄」や『文中子中説』に信憑性があるならば、王度とまでは行かずに、王凝とは別人である芮城府君の存在は首肯できよう。そしてさらに魯迅の説のごとく『古鏡記』に記された記事を実質と認めるならば、孫氏の説のように芮城府君王度説は成立する。ただその場合は『史略』の文を「文中子通、東皋子績之兄也」「約五八一、一六二五」と改めねばならない。なお『史略』が王績を王通の兄としながら生年をな

ぜ「開皇初」としたのか、また何に據って没年を「武德中」としたのかは未詳。他に『古鏡記』作者王度説を否定するものに段熙仲『古鏡記』的作者及其他がある。『崇文總目』及び『通志』藝文略に古鑿記王勣撰とあることから王通の孫、王勃の兄の王勣であるとす。『文學遺產』増刊第十輯・中華書局・一九三・七
「有王度者、」鉛印本『大略』、初版より七版まで「者、」を缺き、訂正版で附加された。

4 唐初又有『補江白總猿傳』一卷、以至其由來亦頗古矣

七十三

寫印本『大略』八云、唐又有張文成游仙窟、中國已佚、惟日本有之。書記文成奉使河源、入神仙之窟、與二仙女（十娘五嫂）賦詩相酬答、文近駢儷、而時雜俚語、詩亦不佳。前條1で寫印本の唐代傳奇的記述構成に示したように、この部分は第八篇の最後に置かれている。鉛印本は「而貌類獼猴」一句を缺き、「忌者因作此傳、而云以補江總」と「此作」を顛倒し、「而」字を附ける他は「史略」に同じい。校勘を参照。

「小説的變遷」三云、此外又有無名氏做的『白猿傳』、説的是梁將歐陽紇至長樂、深入溪洞、其妻爲白猿掠去、後來得救回去、生一子、「厥狀肯焉」。紇後爲陳武帝所殺、他的兒子歐陽詢、在唐初很有名望、而貌象獼猴、忌者因作此傳。後來假小説以攻擊人的風氣、可見那時也就流行了。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、「補江總白猿傳」據明長州顧氏『文房小説』覆刊宋本錄校、以『太平廣記』四百四十四所引改正數字。『廣記』題曰「歐陽紇」、注云、出「續江氏傳」、是亦據宋初單行本也。此傳在唐宋時蓋頗流行、故史志屢見著錄。

『新唐書藝文志』子部小說家類 『補江總白猿傳』一卷。

『郡齋讀書志』史部傳記類 『補江總白猿傳』一卷。右不詳何人撰。述梁大同末歐陽紇妻爲猿所竊、後生子詢。

『崇文目』以爲唐人惡詢者爲之。

『直齋書錄解題』子部小說家類『補江總白猿傳』一卷。無名氏。歐陽紇者、詢之父也。詢貌獼猴、蓋常與長孫無忌互相嘲謔矣。此傳遂因其嘲廣之、以實其事。託言江總、必無名子所爲也。

『宋史藝文志』子部小說類『集補江總白猿傳』一卷。

長孫無忌嘲歐陽詢事、見劉餗『隋唐嘉話』(中)。其詩云、「聳體成山字、埋肩不出頭。誰家麟閣上、畫此一獼猴」。蓋詢聳肩縮項、狀類獼猴。而老獼竊人婦生子、本舊來傳說。漢焦延壽『易林』(坤之剝)已云、「南山大獼、盜我媚妾」。晉張華作『博物志』、說之甚詳(見卷三異獸)。唐人或妬詢名重、遂牽合以成此傳。其曰「補江總」者、謂總爲歐陽紇之友、又嘗留養詢、具知其本末、而未爲作傳、因補之也。

劉餗『隋唐嘉話』卷中云、太宗宴近臣、戲以嘲謔、趙公無忌嘲歐陽率更曰、聳體成山字、埋肩不出頭。誰家麟閣上、畫此一獼猴。詢應聲云、縮頭連背暖、佞揣畏肚寒。只由心溷溷、所以面團團。帝改容曰、歐陽詢豈不畏皇后聞。趙公、后之兄也。中華書局唐宋史料筆記叢刊本

『少室山房筆叢』卷三二、四部正編下云、白猿傳、唐人以謗歐陽詢者、詢狀頗瘦削類猿猴、故當時無名子造言以謗之。此書本題補江總白猿傳。蓋僞撰者託總爲名。不惟誣詢、兼以誣總、噫亦巧矣。率更世但責其書、而不知其忠孝節義、學問文章、皆唐初冠冕。至今瞭然史策、豈此輩能污哉。率更之子通、亦孀孀父風。而皆爲書名所掩。余所惜歐氏、不在彼也。歐陽詢謬說に反對して中唐成立説をとるものに張長弓『唐宋傳奇作者暨其時代』、近藤春雄『唐代小説の研究』等がある。

『博物志』卷三異獸云、蜀山南高山上、有物如獼猴、長七尺、能人行健走。名曰猴獼、一名化、或曰猴獼。同何の誤行道婦女、有好者輒盜之以去、人不得知。行者或每遇其旁皆以長繩相引、然故不免。此得男女子の誤氣自死、故「不」

取男也。取去爲室家。其年少者、終身不得還、十年之後、形皆類之。意亦謎惑、不復思歸。有子者俱送還其家、產子皆如人。有不食養者、其母輒死。故無不敢養也。及長與人無異。皆以楊爲姓。故今蜀中西界、多謂楊、率皆猥獮化之子孫。時時相有獮爪者也。中華書局范寧考證本

「忌者因此作傳」、鉛印本『大略』、初版から七版まで「忌者因作此傳」に作り、訂正版で顛倒した。これは『史略』をほとんどそのまま襲った「小説的變遷」も「因作此傳」に作り、語法としてもおかしくはないから、訂正版以下新版全集に至るまでを單なる誤植として舊に復すべきである。

5 武后時、以至總是相弄也

七一七

この部分は寫印本『大略』になく、鉛印本で増訂されたものである。鉛印本には莫休符の『桂林風土記』の引用はなく、これは『史略』初版にもなく後の訂正版ではじめて増入された。引用の次の句「則尙其年少時所爲」は鉛印本から『史略』七版まで「蓋卽驚少時所爲」に作る。また「後人亦不復倣其體制」の後に鉛印本は括弧内に「清人秀水陳球以駢文成燕山外史、辭意殊勝、蓋非效法文成者」という一文を入れるが、これは『史略』初版以降省かれた。他に張鷟の生存期間を示す「(約六六〇—七四〇)」が鉛印本にない以外は『游仙窟』からの引用も含めて『史略』と同じである。

「小説的變遷」第三講云、到了武則天時、有張鷟做的『游仙窟』、是自叙他從長安走河湟去、在路上天晚、投宿一家、這家有兩個女人、叫十娘、五娘、和他飲酒作樂等情。事實不很繁複、而是用駢體文做的。這種以駢體做小說、是從前所沒有的、所以也可以算一種特別的作品。到後來清之陳球所做的『燕山外史』、是駢體的、而作者自以爲用駢體做小說是由他別開生面的、殊不知實已開端于張鷟了。但『游仙窟』中國久已佚失、惟在日本、現尙留存、因爲

張鷟在當時很有文名、外國人到中國來、每以重金買他的文章、這或者還是那時帶去的一種。其實他的文章很是佻巧、也不見得好、不過筆調活潑些罷了。

『游仙窟』序言集外集拾遺、全集卷七云、『游仙窟』今惟日本有之、是舊鈔本、藏于昌平學。題寧州襄樂縣尉張文成作。文成者、張鷟之字。題署著字、古人亦常有、如晉常璩撰華陽國志、其一卷亦云常道將集矣。張鷟、深州陸渾人。兩『唐書』皆附見「張薦傳」、云以調露初登進士第、爲岐王府參軍、屢試皆甲科、大有文譽、調長安尉遷鴻臚丞、證聖中、天官劉奇以爲御史、性躁下、儻蕩無檢、姚崇尤惡之。開元初、御史李全交劾鷟訕短時政、貶嶺南、旋得內徙、終司門員外郎。『順宗實錄』亦謂鷟博學工文詞、七登文學科。『大唐新語』則云、後轉洛陽尉、故有詠燕詩、其末章云、變石身猶重、銜泥力尙微、從來赴甲第、兩起一雙飛。時人無不諷詠。『唐書』雖稱其文下筆立成、大行一時、後進莫不傳記、日本新羅使至、必出金寶購之、而又皆爲浮豔少理致、論著亦率詆誚燕穢。鷟書之傳于今者、尙『朝野僉載』及『龍筋鳳髓判』、誠亦多詆誚浮豔之辭。『游仙窟』爲傳奇、又多俳調、故史志皆不載。清楊守敬作『日本訪書志』、始著于錄、而貶之一如唐書之言。日本則初頗珍秘、以爲異書。嘗有注、似亦唐人作。河世寧曾取其中之詩十餘首入『全唐詩逸』、鮑氏刊之『知不足齋叢書』中。今予塵將具印之、而全文始復歸華土。不特當時之習俗如酬對舞詠、時語如矇眊嫫媿、可資博識。卽其始以駢儷之語作傳奇、前于陳球之『燕山外史』者千載、亦爲治文學史者所不能廢矣。中華民國十六年七月七日、魯迅識。韓愈『順宗實錄』卷三癸酉。魯迅引用的中間に「性好詼諧」の一句が入る。劉肅『大唐新語』卷八。

「致章廷謙云〇三三書簡」全集卷十一云、記得日前面談、我說『游仙窟』細注、蓋日本人所爲、無足道。昨見楊守敬『日本訪書志』、則以爲唐人作、因其中所引用書、有非唐後所有者。但唐時日本人所作、亦未可知。然則倘要保存古董之全部、則不刪亦無不可者也耳。慶安本に附けられている注については『游仙窟』序言にでもあまり意見を變えていない。そこでは「唐時人

作」とする。章廷謙校本に附録された周作人の「夜讀抄」末尾には次のように述べる。「遊仙窟」有註一卷、無撰人名字、幸田（露伴）以爲是唐時中國人所註、雖然註中有引堯雅語、疑係後人竄入。這或者也有道理、唯中國向來這類書是沒有人做註的、而且「遊仙窟」上文章生英房序內說、從嵯峨天皇遺物中找出「遊仙窟」來、無人能解云云、可見原來未必有註。英房的序中所說、有些也是誑話、如訪人傳授讀法之類、但原本無註恐怕是不錯的、那箇註本我想是那日本人所做、只是我手邊沒有這書、所以現在也只空說罷了。」魯迅が周作人の「夜讀抄」を附録にすることに賛同したのも、注者日本人説と同じような考えがあったからかもしれない。なお注者中國人説には露伴の他に神田喜一郎「遊仙窟に就いて」（『言語と文學』二、昭五・四）があり、日本人説には奥野信太郎「眞福寺本遊仙窟考勘記」（『史學』第一四卷四号、昭一一・三）がある。

「章廷謙宛（二〇三元書簡）」全集卷十一云、今日問小峰、云「遊仙窟」便將附印。曲園老之說、錄入卷首、我以爲好的。但 是否在中國提及該「窟」的「嚆矢」、則是疑問。查「東瀛」有河世寧者、曾錄「御制（纂？）全唐詩」失收之詩、爲「全唐詩逸」x卷、內有該「窟」詩數首。此書後經鮑氏刻入『知不足齋叢書』第卅（？）集中。刻時或在曲老之前亦未可知、或者曲老所見者是此書、而非該「窟」全本也。これは同年十月十八日の章宛の書簡でも「蔭翁考據亦不見出色、我以爲可不必附了」と言うように俞樾の「遊仙窟」への言及はまったく魯迅の推測の通りであった。「茶香室四抄」卷十三に收める「遊仙窟詩」がそれ、ここで俞樾は「全唐詩逸」所載の詩を元人による僞作かと疑っている。

『舊唐書』卷一四九張薦傳云、張薦字季舉、深州陸澤人。祖薦字文成、聰警絕倫、書無不覽。爲兒童時、夢紫色大鳥、五彩成文、降于家庭。其祖謂之曰、「五色赤文、鳳也、紫文、鸞也、爲鳳之佐、吾兒當以文章瑞於明廷」、因以爲名字。初登進士第、對策尤工、考功員外郎薦味道賞之曰、「如此生、天下無雙矣。」調授岐王府參軍。又應下筆成章及才高位下、詞標文苑等科。薦凡應八舉、皆登甲科。再授長安尉、遷鴻臚丞。凡四參選、判策爲銓府之最。員外郎員半千謂人曰、「張子之文如青錢、萬箇萬中、未聞退時。」時流重之、目爲「青錢學士」。然性褊躁、不持士行、尤爲端士所惡、姚崇甚薄之。開元初、澄正風俗、薦爲御史李全交所糾、言薦語多譏刺時、坐貶嶺南。刑部尚書李日知奏論、乃追

敕移於近處。開元中，入爲司門員外郎卒。鸞下筆敏速，著述尤多，言頗詼諧。是時天下知名，無賢不肖，皆記誦其文。天后朝，中使馬仙童陷默啜，默啜謂仙童曰：「張文成在否。」曰：「近自御史貶官。」默啜曰：「國有此人而不用，漢無能爲也。」新羅、日本東夷諸蕃，尤重其文，每遣使入朝，必重出金貝以購其文，其才名遠播如此。

『新唐書』卷一六一張薦傳云，張薦字孝舉，深州陸澤人。祖鸞，字文成，早惠絕倫。爲兒時，夢紫文大鳥，五色成文，止其廷。大父曰：「吾聞五色赤文、鳳也，紫文、鸞也。若壯，若以文章瑞朝廷乎。」遂命以名。調露初，登進士第。

考功員外郎鸞味道見所對，稱天下無雙。授岐王府參軍。八以制舉皆甲科，再調長安尉，遷鴻臚丞。四參選，判策爲鉉府最。員外郎員半千數爲公卿稱「鸞文辭猶青銅錢，萬選萬中」，時號鸞「青錢學士」。證聖中，天官侍郎劉奇以鸞及司馬鏗爲御史。性躁下，儼蕩無檢，罕爲正人所遇，姚崇尤惡之。開元初，御史李全交劾鸞多口語訕短時政，貶嶺南、刑部尚書李日知訟斥太重，得內徙。鸞屬文下筆輒成，浮豔少理致，其論著率詆誚蕪猥，然大行一時，晚進莫不傳記。武后時，中人馬仙童陷默啜，問：「文成在否。」答曰：「近自御史貶官。」曰：「國有此人不用，無能爲也。」新羅、日本使至，必出金寶購其文。終司門員外郎。

莫休符『桂林風土記』云，張鸞，字文成。深川陸渾人也。後趙右侯寶之裔。鸞少聰敏過人。其祖齊工文學，以當時儒士多稱鸞之才，莫不嘆異。因曰：我孫爲人所知。如天以鸞鸞爲鳳凰之佐，五色成文。因名鸞字文成。弱冠應舉。下筆成章。中書侍郎薛元超，特授襄樂尉。遷監察御史司門員外。開元中，姚元崇爲相。誣其奉使江南受遺賜死。其子上表請代父死。黃門侍郎張延珪，刑部尚書李白等，連表稱寃，遂減死流嶺南。數年起爲龔州長史。卒年七十三。文成凡七舉，四參選，皆中甲科。正諫大夫員半千謂人曰：張子之文，如青銅錢，萬揀萬中。時號青銅錢學士。久視中，太官令馬仙童陷突厥中，默啜問曰：文成何在，此人何不足用。又新羅日本國，前後遣使入貢。多求文成文集歸本國。其爲聲名遠播

如此。著雕龍策、帝王龜鏡、朝野僉載二百卷。文成以五爲縣尉、因著才命論以適志、盛行於世。有季季探者、注才命論。言是燕公詞。蓋不覽唐史、率意紀文、大惑時人、一向紕繆。休符駁議。叢書集成初編本。この書からの引用は訂正版でなされた。魯迅はおそらく『龍筋鳳髓判』と『朝野僉載』の『四庫提要』の記述から氣附いたものと思われる。ただし一九二七年の『游仙窟』序言にはこの書に據ったところは見えないから、それ以降の注意によるものであろう。籍貫を「深川陸渾」とするのは誤。

『朝野僉載』六卷 寶顔堂秘笈本。近刊「唐宋筆記史料叢刊」(中華書局・一九七〇本)は寶顔堂本を底本に校訂を加え、逸文をも輯録している。

『龍筋鳳髓判』四卷 湖海樓叢書本、學津討原本、海山仙館叢書本等がある。

『魯迅藏書目錄』に『游仙窟』は著録せず、「書帳」にも記録はない。しかし許壽裳手抄の「日記」一九二二年二月十七日に「沈尹默寄來『游仙窟鈔』一部兩本」とあり、二六年二月一九日「日記」に「下午矛塵來假去『游仙窟』二本」とあり、さらに二七年七月九日の章廷謙宛書簡に「該『游仙窟』如已另抄、則敝抄當已無用、請便中帶來爲荷」と言うのを見れば、魯迅は沈尹默から借りた日本刻本二冊を抄寫したのだろう。また善本が手に入ればそのまま影印すればよいと何度も章廷謙に書いているから、かれの抄本は日本で最も普及した元祿刊本の系統のものに據ったと考えられる。この抄本は失われたらしく『魯迅手蹟目錄』も著録しない。なお章廷謙(川島)校本『游仙窟』出版の過程で魯迅はひとから慶安刊本を借りて抄寫し、校訂のために章廷謙に贈っている。照影一葉が『文學遺產』(一九二・三)に見える。章校本『游仙窟』は一九二八年北新書局から前掲の魯迅の序と周作人の「夜讀抄」と題する、幸田露伴の『蝸牛庵夜譚』による解説を附して出版された。同書はまた最近「魯迅作序跋的著作選輯」(一九七)の一冊として上海書店から影印版が出された。この書の出版の経緯については章川島「記重印『游仙窟』」(『人民文學』一九七・六)に詳

七版以前の舊に復すべきである。訂正版まで莫休符からの引用文がなく、「則尙其年少時所爲」を「蓋卽驚少時所爲」に作ることはすでに述べた。「十娘五嫂」、鉛印本『大略』、初版から十一版、さらに三八年版全集、三十年集版に至るまですべて「十娘五娘」に作る。五七年版全集に至ってはじめて訂された。だが、「小説的變遷」でも「十娘五娘」とあるから魯迅はそう記憶していたのであろう。「游仙窟」原文に即せばむろん「十娘五嫂」でなければならぬ。

6 所引『游仙窟』

七十八

章川島「記重印『游仙窟』」『人民文學』一九五七・八云、魯迅先生借給我的那一部『游仙窟抄』、大抵就是元祿本的翻刻本、其中文字脫訛頗多、在本文中還屢雜着和文的句法和字法。及至動手校點、方知不是那麼容易。後略。

章廷謙の推測の通り、魯迅の抄本は元祿本（の翻刻）に據っている。そして『史略』の引用もその抄本に據っている。引用部分のうち「清音眺、叨」は慶安本同じく作るが、醍醐寺本及び眞福寺本は「清音叫、眺」に作る。兩抄本とも音標記は「ケウテウ」だから、「叫眺」に作るべきである。慶安本ではそれが轉倒してなおかつ「叫」字が抄本「叫」に近いので立刀に見誤り、「眺叨」となったのである。「因詠曰」は初版より三十年集版までが「因詠、曰」に作り、五七年版全集で「謝」に改められた。しかしテキストとしては「謝」に改めた方がよいとしても、それならば全部に手を入れるべきで、ここは元祿本にそう作るのだからよけいな改訂であろう。慶安本は「詠」に作るが、兩抄本は「謝」に作る。「情、乖、若胡越」これは章廷謙のいう「和文的句法」で前の句が「得意似鴛鴦」だから當然「乖情、若胡越」とならなければならない。慶安本はむろん眞福寺本さえ誤り、醍醐寺本のみ正しく作っている。章校本は「叨、眺」に作る他は諸本によって「謝」「乖情」に訂してある。

（待續）